

札幌市立宮の森小学校の取組

1. 研究のねらい

本校は、アメリカ合衆国ポートランド市のリッチモンド小学校と、平成 17 年より児童の作品交換などの交流を進め、平成 20 年に姉妹校提携を結んだ。その後、平成 22 年と平成 24 年の 2 度に渡ってリッチモンド小学校児童の訪問団が来校するなど交流を積み重ね、特色ある国際理解教育を展開してきた。

① リッチモンド小学校との文化交流の意義

リッチモンド小学校は、授業時間の半分を日本語で行うなど、日本語教育に力を入れている小学校である。小学校卒業学年である 5 年生を終えた 6 月に、これまで学んできた日本語の成果を確かめ、日本文化に触れることを目的として、本校への訪問を企画している。このような、日本への意識の高い姉妹校の児童を迎えて文化交流を行うことは、英語やアメリカの文化への興味・関心を高めるだけではなく、自国の文化を見つめ直すきっかけともなると考えた。

② 今年度の文化交流のねらい

今年度は、5 年生の児童 11 名、保護者 3 名、教師 1 名が、6 月 20 日から 25 日まで本校を訪れた。文化交流を単なるイベントで終わらせないよう、次のねらいを設定し、職員の共通理解を図った。

- ・交流を通して、日本の文化や言語を伝えるとともに、アメリカの文化や言語にふれ、興味・関心を高める。
- ・交流をきっかけに、外国の文化や日本の文化について自分のもつ課題を追究する力を育てる。
- ・我が国の伝統と文化を大切に、世界の人々の様々な生活や文化を理解し、尊重する態度を養う。



これらのねらいは、「札幌市学校教育目標の重点」の国際理解教育のねらい（我が国の伝統と文化を大切に、世界の人々の様々な生活や文化を理解し、尊重する態度を養う）と軌を一にすると考えている。

2. 取組内容

① 互いの心を近付けた「歓迎セレモニー」

まず、リッチモンド小学校の児童が、英語と日本語で自己紹介をした。流暢に日本語を話せる児童も多く、本校児童は興味深そうに聞いていた。また、11 人全員で踊って歌うパフォーマンスも披露し、大きな拍手を受けていた。本校の児童からは、リコーダー演奏や縄跳びなど歓迎の出し物を披露した。セレモニーの終盤では、互いにハイタッチをする姿も見られた。



② 姉妹校児童と共に学ぶ授業の工夫

訪問団の 5 年生児童 11 名は、5 年生と 6 年生の各学級に分かれて入り、授業を受けた。5 年生は、算数の授業で「世界の割り算の筆算」を学習し、国によって筆算のやり方に違いのあることを実感的に理解することができた。

6 年生は、国語の授業で「五・七・五で表そう」の学習に取り組んだ。リッチモンド小学校の児童は、これまで勉強してきた日本語学習の成果を発揮して自分らしい作品を仕上げ、本校の児童と作品を交流した。



③ 我が国の伝統文化の見つめ直し

姉妹校交流では、日本の伝統文化のよさを外国文化との比較から再発見・再認識し、互いの文化を尊重しようとする態度を養うというねらいを設定している。リッチモンド小学校の児童を迎え入れるに当たり、子どもたちが日本らしい学習や遊びに触れることのできる活動を多く取り入れることとした。

<毛筆書写の学習>

5学年と6学年が体育館に集い、書写した文字は「道」である。書写に取り組む場面では、本校の児童がリッチモンド小学校の児童に書き方をアドバイスする姿も見られ、交流しながら書写の作品を仕上げた。



<日本の伝承遊びを通じた交流>

けん玉、こま、おはじきなどの遊具を廊下の棚に配置し、自由に遊べるようにした。休み時間には、本校の児童が遊び方をリッチモンド小学校の児童に身振り手振りで教えるなど、楽しく交流している姿が見られた。「仲間と関わりながら遊べる。」「練習することによって上達の喜びが味わえる。」など、日本の伝承遊びのよさを互いに実感することができた。

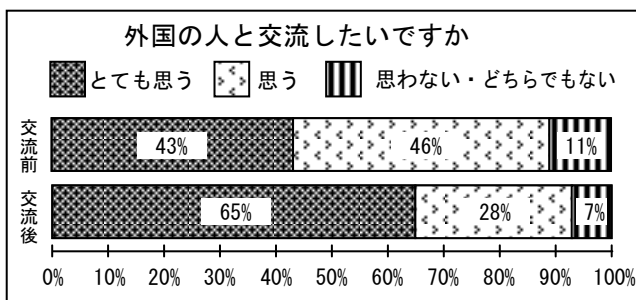


④ 各学年の創意を生かした文化交流

訪問団が教室に入らない1年生から4年生の児童も、交流への意欲を高め、日米の文化や言語に目を向けられる取組を工夫した。1・2年生は、「日本」をイメージするものをカードに描き、3年生は、札幌のことを伝える「おもてなしカルタ」を作成し、それぞれ廊下に掲示した。4年生は、歓迎セレモニーで、「エーデルワイス」の合唱や、呼び掛けを英語で行い、次年度の授業交流や活動に具体的な目的意識が芽生えた。交流を通して、1年生から4年生の児童にも、「英語であいさつしたよ。」と担任に報告する姿や、「英語で自己紹介したい。」と練習を重ねる姿などが見られ、伝え合うよさや異文化への関心を実感する充実した文化交流となった。

3. 成果と課題

リッチモンド小学校との文化交流にかかわり、本校5・6年生の児童にアンケートを実施した。アンケートは、児童の意識の変容を捉えるため、交流前と交流後の2回実施した。



交流を通して、「外国の人と交流したいですか。」の質問項目に「とても思う」と答えた児童の割合が22%増加した。「アメリカの文化をもっと知りたい。」「日本のいいところと一緒に探したい。」など、国際理解教育のねらいに迫る感想も多くあり、取組の成果が見られた。児童は伝え合うことのよさや、人と関わり自分の世界を広げていく楽しさを実感した。

今後は、国際理解教育の中で、多様性を認めるよさを意図的に取り上げていくことを課題とする。文化や価値観の異なる人々と交流する楽しさや新たな気付きをもとに自らの豊かさを広げ、より人間関係形成力を高めていきたい。また、これらのことを職員で共通理解して、活動を推進していきたい。